

ウィリアム・アーヴィン著

ウォルター・バジョット (1)

訳 渡 辺 弘
立 川 順 子

第一章 老成した若者

ウォルター・バジョット (Walter Bagehot) はヴィクトリア朝時代の偉大な英雄の一人に数えあげられる人間ではなかった。彼はアフリカに経済上の植民地を建設したり、重要な運動の唱道者となったり、女王陛下からナイトの爵位を授けられたのではなかった。カーライル (Carlyle) のような警世の人でもなく、またアーノルド (Arnold) のような独自の優雅な脱俗の精神を主張して、大衆にアテネの貴族への憧憬を植えつけたりもしなかった。彼は悪弊の十字軍的改革者、社会改革の主唱者でもなければ、新しい宗教の指導者でもなかった。周知のように、ウォルター・バジョットは生前、金融界においてかなり重要な地位を占め、ある程度の財を成し、権威ある雑誌の編集に几帳面に取り組み、『シティ』(ロンドンの金融の中心地：訳註)に多大な影響を及ぼし、晩年には重厚な大著を2、3冊、青年時代は評論を矢つぎばやに発表し、30代の頃は未来の妻へ格調高いラブ・レターを書いた。そんな人物を忘却の淵に追いやるものがあるとしたら、それは何であろうか。しかしながら、彼を知る同時代の人間は幾人も、夜会で彼に会うととも魅力的な人間であるのがわかると断言している。「ロンドン中で彼ほど話しかけて面白い人間はいないと言ったら、言いすぎになるであろうか」とブライス卿 (Bryce) は語っている。その著作を読めば、彼がまた才気にあふれた人間であることが明らかになり、バジョットの生涯はヴィクトリア朝時代の人には珍らしく、伝記の上で不明のところが比較的少なく、彼が思慮深い人間であったことを証明している。とは言え、彼の経歴から不運

と悲劇を全く除外することは適切でない。以下に記す略伝において私はエネルギーで思慮に富んだ人間のドラマを可能な限り簡潔、鮮明に描き、その個性を活写し、多くの散文に伝記的注釈と解説を提供し、なかんずくある仮説を提示したいと思う。というのはバジョットの生涯は一つの哲学——知性、倫理性を全て完全に様々な形で行使することによって、幸福を獲得せんと努力するというアリストテレスの概念——の影響を大いに受けていたということは、どの著作にも明白にみられることだからである。彼の著作同様、彼の生涯は人生が世俗的になったり、貪婪になったりせずに現実的であるべきであり、また偏狭、幻想に陥ることなく宗教的で、表面のみに囚われるのではなく多面的で豊かで人間的であるべきだという概念によって支配されていた。

ウォルター・バジョットは1826年2月3日、サマセットシャーの中心部からはずれた静かな小さな町であるラングポートに生まれた。その静かで辺境の土地の過去は、特異な大事件をいくたびかかい間見ながら、イギリス自体の過去にはるかに連らなっている。パレット河が航行不可能になる地点の丘陵地帯に位置し、防衛と貿易の点でも同様に優れていたのも、ローマ人による占領が行われる以前も重要な拠点であった。ラングポートの土地はローマ人とサクソン人の侵入にも生き延び、サクソン人統治の時代には直轄自治都市となり、1086年には34名の在留自治市選出代議士をもった。14世紀の初めには議会に2人の代議士を選出し、しまいにはその自治市の公民たちは、バジョットが好んで説明したように、自分たちのポケットにあるお金の方がロンドンにいる代表よりましだと考えて議員に支払う費用を免除するようエドワードI世に請願したのだった。しかしもし立派な議員がロンドンで歴史に残るほどの偉業を成し遂げないとすれば、彼らはまさに自分たちの戸口のところで歴史が作られるのを止めることもできないだろう。自己充足的で平凡なその小さな町は、イギリスの歴史と伝説の最もロマンティックな記憶のいくつかに包まれている。アセルニィでアルフレッド大王 (Alfred the Great) は焼くよう任されていた有名なケーキを焦がしてしまったと伝えられ、アレーで勝利をおさめた彼はデーン人の王のガスラン (Guthrun) にキリスト教の洗礼を受けるよう導いた。セジムアでは

若きチャーチル (Churchill) がモンマウス公 (Monmouth) を打ち破り、ゴアリング卿 (Goring) はラングポートの戦の後、王党派の軍隊とともにキングスミアの地を退散した。バートン・ピンセントではチャサム卿 (Chatham) ——その息子に関する評論をバジョットは書いている——は壮大な館を築き、未完成のまま、華々しい生涯の悲劇的な最後までそこで暮した。

晴れた日には、これら全ての陸標は町のはずれのハーズ・ヒルの頂上にある心地よい庭の中央に位置する大きくて快適なバジョットの少年時代の家から識別できる。

1772年頃、バジョットの大叔父のサミュエル・スタッキー (Samuel Stucky) がラングポートにサマセットシャー銀行を創立し、小さな町はイギリスで最大の民間発券銀行に成長した銀行の本拠地となった。バジョットの父は30年間、この銀行の専務取締役兼副頭取で、後年その地位は彼の息子に引き継がれた³⁾。18世紀の初め以来、150年間に渡ってスタッキー家とバジョット家の両家はラングポートの諸事を支配していた。河川及び海洋貿易を通じて、両家は小さな田舎の地域社会を重要な金融上の中心地に変貌させた。ビジネスにおける結びつきが長かったので、両家は何度か結婚による縁組みを行ない、ウォルター・バジョットは母親がジョセフ・プライア・エストリン (Joseph Prior Estlin) との最初の結婚の前の姓がエディス・スタッキー (Edith Stucky) であったので、この縁組みによる一人息子となった。150年間に渡る商業と金融上の成功は、先祖代々の才能とエネルギー、教育と訓練の健全な伝統を表わすものと考えられよう。両家のうちでバジョット家の方は、明らかにそれほど名門でもなく、実業の面でもあまり有能ではなかったが、芸術及び知的営みにはよりいっそう熱心であった。「一家の先祖は15世紀にまでさかのぼることができ、リチャード・バジョット (Bagehot) 別名、バジャー (Badger) またはバゴット (Baghott) という人物が、当時グローセスターシャーのプレスツベリーで一家の資産を所有しており、それはバジョット家により前世紀まで途切れずに保有された。一家のうち幾人かはナイト爵で、州長官であった者も多く、軍人もいれば聖職者もいた⁴⁾」とバジョットの義妹で伝記作者であるラッセル・バリントン夫人 (Rus-

sell Barrington) は語っている。1747年頃、ウォルター・バジョットの曾祖父がラングポートの地に移住してきて、一家はその地域社会で急速に名を成していった。上流階級の威厳と教養とともにその階級に付属する騎士の精神を彼らが保持していたと断定する手だてでは私にはない。しかし、その騎士の精神は一家の最後にして最も有名な相続人(ウォルター・バジョットのこ：訳註)にきわめて顕著にみられることは確かである。

ウォルターの父、トマス・ワトソン・バジョット(Thomas Watson Bagehot)は類稀なほど賢明で愛情深い父親であった。恐らく彼の最大の業績は息子に施した教育であろう。良心的なレビ人(特にユダヤの神殿で祭司を補佐した者：訳註)ほどではないにしても、彼はつまるところ、より温厚なアーノルド博士(マシュー・アーノルドの父で英国の教育家：訳註)のような人物であった。彼は同じく強靱、真摯で男性的な知性の持ち主で、その知性は当然、人間とその重要な事柄に深く関わっていたので、実務、政治、宗教及び特に倫理面における人間性のより広範な原則を理性的かつ精力的に扱っている。知性的な人間ほど若人の教育に適している者は恐らくいないであろう。そのような精神には自らの周りに障壁を築いたり、子供を疎外するような抽象的なところや『深遠な』点は何にもなく、子供のあざけりを喚起しかねない気まぐれな点、不安定な要素もない。トマス・バジョットは暴論にも性急な実験にも心を動かされることがなかった。そしてまさに彼自身の節度がウォルターのような非凡な生徒に恒久的な影響を及ぼし続けようという試み全てに対する安全弁となったのである。彼はウォルターの性格を形成し、それを発展させることができた。彼は成長したウォルターの性格を曇らせることは望んでいなかった。論理的、具体的に明らかに根本的には健全な彼の知性は、少年が理解し悟ることができ、最初から彼の信頼と称賛を勝ち得るような知性であった。それは初歩的な原理について明晰さと簡明さを持ち、思考を導く優れた端緒となっている。

精神面においては、トマス・バジョットは強い印象を与える人間であった。堅固な慣習と銜学的な几帳面さを特徴とするいかめしいヴィクトリア朝人の仮面の背後に、実に豊かな人間性が存在し、そこにおいては厳格な良心の不可欠

性は『稀有なほど深く暖かな情愛』で和らげられていた。彼の理解力、気転、適応力は特に愛の感情に支配されているときは、驚嘆すべきで、彼についてのバリントン夫人の評論を読んだ者は、トマス・バジョットが息子の尊敬を失わずに信頼を勝ち得、権威を犠牲にすることなしに親密な感情を抱かせることのできた人間であったと感じないわけにはいかない。厳格なほど良心に忠実であった彼は、ウォルターに健康を損なうほど厳しく計画的な勉強を強制した。しかし彼はその勉強が味気ないものとなったり、興味を引きつけないものにはさせず、彼の態度も常に優しく愛情深いものであることを心がけた。「私はお前のことばかりを思い、父親としてお前の幸福を祈りながらチェダーまで旅をしました。そして帰ってからも他のことは考えられませんでした。お母さんも私もお前からの便りを首を長くして待っています⁶⁾」と彼はブリストル・カレッジに送ったあとで息子に宛て書いている。類稀な巧みさで彼は息子に対して年上のより賢い学友の役割を演ずることに成功した。これまで遊ぶときは彼らは少年のようであり、政治を論ずるときは大人同志であった。父親として彼はたびたび道徳的な忠告をしたが、推測しうるように、押しつけがましいことは一度もなかった。彼は謙虚さを『少年の最大の美德であり、謙虚であればあるだけ賢くなる⁶⁾』と考えた。

彼は実業家であるだけでなく、多芸の人でもあった。人に教えられるほどの才能を彼はもっていた。常に自然の美しさを受する人間である彼は、かなりの腕前の水彩画家であり、彼自身の所有地の大変巧みな庭師でもあった。彼は博覧強記の読書家であり、近代イギリス史の知識が特に秀でていた。ハットン(Hutton)の言葉によれば、「18世紀後半のイギリス政治史に関する詳細を必要としているときは、父親に聞きさえすれば得られた⁷⁾」とウォルター・バジョットはよく語っていた。確かに自然の美しさ、詩の美しさに対するウォルターの幼いときからの愛、芸術と絵画への彼の確固とした意見、少壮の政治評論家としての才気は少なからず父親の薫陶の賜物であった。

魅力的であるが不幸なエディス・バジョット夫人に関しては、ここではさほど言及する必要はなからう。ウォルターが彼の天分に安定性を与えた種々の性

質の点で父親に似ているとしたら、その安定性にひらめきを与えた性質については母親似であった。陽気で感受性豊かな性質、鋭敏で想像的な精神、人間と習慣へのユーモラスな洞察、あらゆる種類の知的活動に対する熱意を母親と息子は共有していた。バジョット夫人は幼少期の息子にとって、愛情深く根気強い教師であり、後には素晴らしく共感し合える親友となった。小気味よいユーモアと機知に富んだウォルターの独特な言いまわしは、父親には幾分不可解であったが、母親にとっては大部分、自分の語法であったので、全て理解できるものであった。彼女は信心深い英国国教徒であり、ウォルターの若き日の手紙には母親の敬虔な内省を忠実に伝える反響が多くみられる。

特にごく幼いときにはウォルターは活発で頑固なところのある子供で、自制心に欠け、危険を好み、遊びに熱中した。G. H. ソーテル (Sawtell) がスタッキー家の庭でのある日曜の集りにおける彼の一面を興味深く次のように伝えている——「母親が彼を紹介したいと思ったとき、彼は大きな木によじ登って、びっくりさせるように大枝のてっぺんから集まった人々を睨みつけるように見下ろして、自分の日曜日用の晴着をだいなしにしてしまった⁸⁾」「彼はバートン・ピンセントの遺跡のてっぺんによじ登り、ですりや防護物で守られていないその塀の周りを走り回って母親をはらはらさせたものだった⁹⁾」とバリントン夫人が語っている。彼は父親とゲームを楽しみ、同年代の仲間がいない利口な少年たちの多くと同様に、ハーズ・ヒルの庭におけるサラセン人の大虐殺者となって、空想の中で過ごすことが多かった。何年も後になって、彼は次のように書いている。

しかし一般的に言って、この内面生活に関しては子供たちは多くを語らない。何か好戦的な考えを抱いても、筋骨たくましい親戚に次のようには言えない。「叔母さん、庭の大きなやぶはいつ歩き回り始めるのでしょうか。私はそれはきっと十字軍の戦士のカモフラージュだと思います。それで一日中私の鋼鉄の剣でそれを切りつけました。でも叔母さんはどう思いますか。こんなことを聞くのは私がその足に当惑しているからなのです。何故ってそれには茎が『1本』しかなく、おまけに葉までちゃんとついているからです。」¹⁰⁾

概してウォルターの少年時代はむしろ灰色の少年時代であった。それには悲劇的な調子が漂っていた。ソーテルの興味深い説明の中に、白痴の異父兄であるヴィンセント・エストリン (Vincent Estlin) と一緒にウォルターについての同情を誘うちょっとした描写がある——「20個ほどの時計が一斉にチクタクいい、一分もたがわずに時報を鳴らすなかで(このようなことがヴィンセント・エストリンの時間に関する奇癖であった) 算数をし、母親の方は不憫なヴィンセントのためにかん高い声でできるだけ速く *Quentin Durward* (スコット作。1823年:訳註) を読んで聞かせた」¹¹⁾。冒険好きな性質にもかかわらず、ウォルターは勤勉で従順な少年であり、彼が主として両親の影響で大学に入学する時までその傾向は続いた。彼がまだごく幼いときに、母親は彼にスコット (Scott) とディッケンズ (Dickens) を読んで聞かせ、自分自身の注釈を付け加えたギリシア語の聖書を教えた。彼が学校生活を送るために家を離れてしまっても、何年にもわたって、父親は歴史の問題についてのレポートを宿題として課し、添削を行ない、数学の問題と一緒に解き、当時の政治問題について常に『情報通』となるよう奨めた。

ウォルターは幼い頃より神童であり、絶えず真面目で頭脳明晰な大人と交わっていたので、彼は当然、並はずれた秀才となった。ある点では彼は少年時代を過ごしたことの無い人間のようにであり、またある点では少年のままであった。6才のとき、親類の間に宗教のパンフレットを配るのを習慣にしていた熱心な低教会派信者であるレイノルズ叔母 (Reynolds) に手紙を書いて「時々ポケットに入れて毎朝その中の聖句と詩を読んでいると、ぼろぼろになってページがなくなってしまうのではないかと思いますので、クリスチャンのためにもう一つの日々の糧を送って下さい」¹¹⁾ と頼んだ。

5才のときにウォルターは家庭教師のジョーンズ (Jones) 嬢の教えを受けた。8、9才で彼は『昔からの財団法人組織学校であるラングポートのグラマー・スクールの有能な校長を56年間、務めた有名なクエケット氏 (Quekett)』¹²⁾ の昼間の生徒となった。12才になるとブリストルにある男子中等学校であるブリストル・カレッジに入学し、1839年の8月から1842年の夏休みまでの3年間、そ

ここに在籍した。バリントン夫人は最初の年のウォルターのカリキュラム（教科課程）が4つの科目、すなわち古典、数学、ドイツ語、ヘブライ語から成っているということ以外に、このカレッジに関する知識を殆ど何も提供していない。しかしながら当時の出版物である、チルコット（Chilcott）の著した『ブリストルの歴史詳解』（*Descriptive History of Bristol*）によって更に詳細な知識が確かめられる。

ブリストル・カレッジはロッジ・ストリートの上端に位置するパーク街にある。この学校の目的は、ブリストルとその近郊の住民及び遠方より来たる者に、最高の古典及び科学の教育の利点を最も適切な条件で授けることである。それは『副校長』と『数学教授』の監督のもとに置かれている。

カレッジの教科はウィンチェスター、イートン、ウェストミンスター、ハーローといった私立学校で授けられる古典教育を含んでいる。数学と古代及び現代文学の教育が充分なので、カレッジにおける生徒は各自、修得する余地が与えられている。

入学年令は12才から13才までである。ギリシア語とラテン語の初歩についての心得と算数の初級は大体において修得されているものとみなされる。試験は全学的に毎年1回実施され、その際、能力と精励勤勉ぶりの著しい生徒にはメダルか該当する賞が授与される¹³⁾。

1864年まで古典語だけが大部分の中等学校で真剣に扱われた唯一の科目であり、有名私立学校のうちで最も進取の気象に富んだラグビー校でさえも、トマス・アーノルド（Thomas Arnold）が校長の地位に就任するまで（1837-42）、フランス語と数学を正規の科目とはしていなかった。それゆえ、早くも1838年にこれらの科目を開講していたブリストル・カレッジは、当時イギリスに多く存在していた教設の進歩的学校の一つであったようだ。ブリストル・カレッジは恐らく実学を重んじ、管理の行き届いた学校であったのだろう。少なくともその学校でウォルターは、いかに非凡な生徒でも容易には修得できない学科である、数学と古典文法を完全に修めたので、後にロンドン大学で最優等賞を獲得した。そしてブリストル・カレッジは当時の学校に共通してみられた粗野な振

舞いから免れることはなかったが、少なくとも飲酒、賭博、下級生酷使、むち打ちといったもっと甚だしい非行は全くなく、その点が単に洞察力のある観察者であるだけでなく、情報を得る特別な手段をもっていたウォルターの父親の是認を得たのだった¹⁴⁾。ブリストル市は当時、長老のアディントン・シモンズ (Addington Symonds) や民族学者のジェームス・カウルズ・プリチャード博士 (James Cowles Prichard) のような著名な学者の一団の居住地であった。バジョット夫人は後者とは最初の結婚により縁続きであった。確かにこの縁故のおかげでバジョット氏はブリストル・カレッジについての詳細な情報を提供されたのみならず、息子をそこに入学させるよう決断する大きなきっかけを与えられた。というのは、ウォルターは他の生徒たちとともに牧師の家に寄宿していたが、暇な時は多くプリチャード博士の家族とともに過ごし、彼の父親はできる限り一家との会話から学びとるようウォルターに助言していたからである。明らかに彼は父親の熱意以上の恩恵を授けていた。何故ならある時、彼は母親であるバジョット夫人に恐らく『天真らんまんさ』と後年の悪戯じみた気持を込めて次のように書いているからである——「私は木曜日にプリチャード家で食事をしました。夫人はたいそう元気がありませんでしたが、プリチャード博士はそうには見受けられず、いつものようにニーブル (Niebuhr) とエトルリア人の起源について随分語り合いました」¹⁵⁾。

プリチャード家との途切れることのない交際、両親の大きな期待、自らの嗜好——これら全てがウォルターを本に縛りつけることに寄与した。彼は学問において抜きんでようという並々ならぬ熱意を示し、それが大いに功を奏して、彼の選択した学科4つの全てにおいて一番で及第した。余暇は乱読に費され、読書の範囲はメアリー・プリチャード (Mary Prichard) に借りた『パレスティナの歴史』 (*A History of Palestine*) からバイロン (Byron)、ムーア (Moore)、ジョンソン (Johnson) にまで及んだ。後者についての彼の解説は驚嘆するほど円熟している。彼はジョンソン博士のいう『驚愕すべき』死の恐怖に『特に強い印象を受け』、「詩は害悪であるとの非難に対して、それを神聖なものとした最初の人間であった」と彼を大いに推賞したが、「ロバートソン (Robertson) や

ヒューム(Hume)の作品よりもゴールドスミス(Goldsmith)の書いたギリシア史の方を好んだ」¹⁵⁾ ことに対しては疑問を抱いていた。彼はバイロン卿の悲観主義にみられる二つの面を区別し、「詩人が世間の抗議の声によって故国を追放され、彼の以前の名声が地に堕ちたとき」彼はむしろ過大評価されていたことになると考えた。そして彼は次のように結論づけている——「バイロン夫人は確かに『恐るべき女性』で、まさにその形容がぴったりであった。しかしムーアはバイロンの親友であったが、彼の過誤を隠蔽することはできなかった」¹⁵⁾。

言うまでもなく、彼のこの修道僧のような勉学と読書への没頭ぶりは、教師たちを喜ばすものではあっても、級友の大多数の承認を得ることはできなかった。特にクリケットに選手がもう一人必要なときにはそうであった。そのためちょっとした事件や、時には侮辱的な言動がみられた。ウォルターの行動は明らかに大変男らしく、態度は単に分別があるだけでなく、最も冷静で客観的であった。彼はこれらの衝突について少しの怒りも憤激もなしに語り、ただそれらを自分の勉強を妨げる不都合であると嘆いた。それはまるで不可解にも学生生活という環境の中におかれた謹厳で分別くさい老人が、いかに尋常さを欠いているかに全く気づかずに、自分の経験を描写しているかのようである。ウォルターは母親に以下のような手紙を書いている——

私はたった今、他の生徒たちと遊ぶために連れ出されました。私は数学の問題を解き、中国語の猛勉強がしたかったのです。でも彼らは私を連れ出し、私が遊ぶとうしなかったために私を手すりに縛りつけ、きついお仕置きをし、結局遊ぶ羽目になりました。彼らはチームを作るのに仲間が足りないときには、しきりに私に出てくるように頼むのです。彼らのゲームを台なしにすると厄介なことになります。もし私がそのようなことをすれば、蹴られることはたびたびで、時には口を開けるたびになぐられることもあります。学友の何人かと仲が悪いのは、全く気持の良いものではありません。まして学友全員となるとなおさらです。このために私は最近、ブロムリー氏(Bromley)と一緒に数学の問題を解くことが以前のようにはできなくなりました¹⁶⁾。

しかし少年たちは自分の愚かさをすばやく悟った人間といつまでも仲たがいがしたままではできなかった——「私は昨日、初めて水の中に入り、ガ

チョウのようになりましたが、フランネルのチョッキを着たままベッドに入りました。そのために勿論、予期していた通り、皆からさんざん笑われました」¹⁶⁾。ウォルターにはもう一つの取り柄があった。「イースター用のケーキは大喝采のうちに連中ののどを通り、これまでに作られたうちで一番おいしいケーキだといわれました」¹⁶⁾と彼は母親に伝えている。確かにカレッジにおけるウォルターの立場は、それがどのようなものであったにせよ、臆病で引込み思案な『ガリ勉』というものではなかった。恐らくバリントン夫人が言っているように、「天性の謙虚さと明朗さに結びつけられた彼の非凡な才能と、個性、独特なユーモアが及ぼした奇妙なほど力強い影響力は、幼少期から独自の非常に個性的な立場を彼に与えた」¹⁷⁾のである。

ウォルターが学友たちを『連中』と表現していることは、意味深長である。若い頃、彼には傲慢なところがかかなりあった。この欠点は彼自身の長所を過大評価することに由来していたのではなかった。何故なら彼ほどその長所を冷静、明確にみていた者は誰もいなかったからである。むしろそれは無類の活力と超然とした精神、つまり奇妙なことに気軽な気持で戯れることができないということに起因していた。彼は学友たちが明らかに暴徒のような振舞いをするのがよくあり、自分及びえり抜きの友人たちと比較すると彼らは暴徒であり、それゆえそのようなピッタリした表現を使うのをためらわなかったのだと意識していた。また彼らを観察して得られた意見を内に秘めておくこともしなかった。彼の率直で活力に満ちた心の働きは、より穏やかな思慮分別とかなり激しく衝突することがしばしばであった。G. H. ソーテルはその独特な語法の複雑さと同様に議論においても評価を下げたとしても、攻撃的な人間ではなかったが、こう語っている——「バジョットは14才にして会話に生意気なところがあり、私に関しては3才年長の私が大都会で何を学び、見聞したかについて知りたがり、結局、常に私が生半可にしか理解していないという気持ちにさせる」¹⁸⁾と語っている。

ブリストル時代はウォルターには二人の親友——エドワード・フライ卿 (Edward Fry) と後年、国会議員になったキルグルー・ウェイト (Killegrew Wait)

しかおらず、しかもこの二人について彼はその書簡の中でめったに言及していない。彼は休日には両親との交わりを楽しんだ。学校では勉強と書物に熱中した。蔵書が増え、時には学者風の浪費が中産階級的儉約の精神とぶつかった。「ダンジャン (Donnejan) のギリシア語辞典を私が買うことにお父さんは反対ですか。それはギリシア語の辞典では最も優れていると思いますし、ブース先生が熱心に勧めてくれ、実際私もそのような辞典が必要だと強く感じています。ただ値段が35シリングなので、それだけが難点です。特に最近、大きなラテン語の辞書を買ったばかりなので、それは高い買物だとお父さんが考えるのではないかと気がかりです」¹⁹⁾。

彼は非常に成績の良い生徒であったので、最終学年の一時期は比べるものがないほどであった。それよりも以前に彼は「放課後、数学教師に個人的に教わり、……高名なカーペンター博士による自然科学、動物学、化学といった当時は大学においても殆ど教えられることのなかった学問の講義に出席した」²⁰⁾。しかしとりわけプリチャード博士との毎日の交わりから大いに得るところがあり、ハットンによればバジョットの人種学的研究の思弁的側面における関心は、もとを辿ればプリチャード博士に負うところが大きいということができ、その所産はバジョットの『自然科学と政治学』(*Physics and Politics*) の中に最もよく反映されている。実際、バジョットは身につけた全てを有効なものにしていた。

大学に入学するときまで、ウォルターは既に述べた通り、主として両親の影響のもとにあった。彼らは彼を指導し、支配した。そしてウォルターが受けた教育は、実際、彼らの仕事であった。明らかに彼はこの教育からまさに最大の利益を得ていた。それは幼年期の彼に莫大な量の知識を与え、勤勉さと集中力という素晴らしい能力を伸ばし、秩序だった生活と思考という習慣のみならず、克己の点でも彼を訓練し、恐らく偶像的な文学者を破滅させかねない錯誤や動揺が、彼の人生には奇妙にも全くみられないことの大きな力となったのであろう。しかし、トマス・バジョットは称賛すべき思慮分別と情愛の深さにもかかわらず、あまりにも厳格でありすぎたのであろう。多くのヴィクトリア朝人と同様

に、彼も人生が緊張と努力を大いに示さなければ、邪悪なものになってしまうと感じていたようだ。ウォルターは絶えざる重圧のもとにあり、極度の疲労に達したときは、その重圧は激烈なものになったに違いない。しばしば彼の態度は、苛酷な長距離レースの駿足ランナーのように張りつめ、神経質であって、虐待されたことのない少年のもつ、たくましい天衣無縫さとは哀れにも程遠かった。彼が反抗に向かわず、また両親の大変な期待と高い要求水準を満たすために、常に熱心に努力したのは、両親の方針と配慮に依るところが大である。しかし、この高い要求水準と期待というものは、もう一つの良心という耐えがたい重圧を伴って時に彼の心にのしかかった。彼は13才のとき学校で母親に次のような手紙を書いている——「昨日“灰の水曜日”(Ash Wednesday)だったので、お休みで皆、教会に行きました。あまりにも休みの日が多いので、お父さんが怒るのではないかと思います」²²⁾。更に、父親に宛た手紙の中ではウォルターが出席していたクラスが終業になったので、これまでよりも暇な時間があると説明して、このように述べている——「これでは私にとっては休日があまりに多すぎるとお父さんが思うのではないかと思います。もしそうでしたら、私は休日返上でいつものように勉強します」²²⁾。彼自身の良心は父親の良心がそうであったように、過ぎゆく瞬間、瞬間の小さな暴君のようなものになっていた。「私は昨晚、本の上でとても奇妙な風に眠り込んでしまい、たいそう長い間眠ってしまったので、眠りについてしゃべろうとすると、私の心が私を懲らしめます」²³⁾と彼は母親に打ち明けている。彼は父親による謙虚さの推めを心に深く留めていたので、自分自身を肯定的に語るのを嫌い、もしそうした場合は殆ど哀れを誘うほど唐突にその話題を脇に押しやるのだった²⁴⁾。学校の優等賞に対する彼の気構えは、緊張し不安に満ちたものであった。

この手紙をもっと前に出さなかったことに対して、私は自分自身を恥づかしく思っています。でも私の点数と順位がわかる 明日まで保管しておくことはないと思います。グレイスは今のところ10番上のところにおり、私はウェイトより30番上のところ です。もし私が古典でトップになれば、3つつまり、ドイツ語、古典、神学で中等部のトップになり、数学では2番目になるでしょう。でも私は空中に城を築いている

のではないかと思います。明日、決まります。とっても心配していることに対して自分をしかっています²⁴⁾。

時にこの心配癖はかなり滑稽な形で現われる。常にヴィクトリア朝中期の間らしさを備えた子供であった彼は、時々見事に小さな老人、はたまた小柄な老婦人に変身する。11才のとき、可愛いらしく熱意を込めて父親に次のように書いている——「2, 3日前にお気の毒にもワトソンおじさんの死を聞きました。おばさんだけでなく、おじさんの娘さんたちにとっても大変な試練になるでしょう。メアリーとサラは何か将来の人生設計を定めたのでしょうか。おじさんが亡くなってしまった一家のことなど私には想像できません。彼女たちの生活はすべておじさんの人生の中に結びつけられていたようですから」。気づかいと懸念に駆られて彼の次のような言葉で手紙を結んでいる——「この冬は夕食後、会計事務所には行かないようお願いします」²⁴⁾

しかし、素晴らしい結果をもたらし教育を人は軽々しく批判すべきではない。それは苦痛を伴わない教育ではなかったが、また実りのない教育でもなかった。ウォルターの苦労性も彼のもっと成熟した時期に書かれた手紙の中では急激に消えている。厳格なヴィクトリア朝の家族の重圧によって引き起こされたものは、その重圧が緩和されると消散してしまった。G. H. ソーテルは12才から16才の間にウォルターの外的な態度が、ある決定的な変化を被ったことに注目している。彼が大学に入る頃までには、その変化は完結していた。真面目で心配性の少年は、多分幾らかは補償の作用のせいで、むしろ快活な青年になっていた。32才のとき彼は婚約者にこう語っている——「私はいつも自分の下す判断をととても気にし、自信がもてませんが、後でそれに疑念を抱いたことは一度もありません」²⁵⁾。彼は決心する際には恐らく用心しすぎるほどであったのだろうが、いったん決心してしまえば決して悩むことはなかったのであろう。

本訳文は William Irvine, *Walter Bagehot* (Archon Books, 1970) の第1章の翻訳である。

- 1) ラッセル・バリントン夫人 (Russell Barrington) による『ウォルター・バジョットの作品と生涯』(*The Works and Life of Walter Bagehot*) x. 458 から引用。

この版の第5巻はバリントン夫人による伝記を含み、第1巻には R. H. ハットン (Hutton) の筆になる回想録が収められている。“伝記”の方は“バリントン夫人”という註で言及され、最初の長い回想録は“ハットン”として引用されることになる。

- 2) “Langport,” *Encyclopedia Britannica*, 14th edition.
- 3) Hutton, p. 3
- 4) Mrs. Barrington, p. 60.
- 5) Mrs. Barrington, p. 61.
- 6) Quoted by Mrs. Barrington, pp. 86, 84.
- 7) Hutton, p. 33.
- 8) Quoted by Mrs. Barrington, pp. 64-5.
- 9) Mrs. Barrington, p. 28.
- 10) Bagehot, “Hartley Coleridge” i. 189.
- 11) Quoted by Mrs. Barrington, pp. 64, 77.
- 12) Mrs. Barrington, p. 81.
- 13) J. Chilcott, *Descriptive History of Bristol*, pp. 207-9.
- 14) R.L. Archer, *Secondary Education in the Nineteenth Century*, pp. 56, 60-1.
- 15) Unpublished Letters: October 1840; March 2, 1841; November 7, 1841.
- 16) Unpublished letters: April 11, 1840; May 16, 1841; May 1, 1840.
- 17) p. 84.
- 18) Quoted by Mrs. Barrington, p. 65.
- 19) Unpublished letter, May 26, 1842.
- 20) Mrs. Barrington, p. 84,
- 21) p. 3,
- 22) Unpublished letters: March 7, 1840; May 15, 1842.
- 23) Quoted by Mrs. Barrington, p. 89.
- 24) Unpublished letters: May 21, 1838; February 26, 1840; October 4, 1839.
- 25) *The Love Letters of Walter Bagehot and Eliza Wilson*, p. 184.